

Title	高齢者介護における負担感とその要因について：研究の動向と今後の課題
Author(s)	中原, 純
Citation	生老病死の行動科学. 2004, 9, p. 91-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8379">https://doi.org/10.18910/8379</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 高齢者介護における負担感とその要因について

## —研究の動向と今後の課題—

(大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程) 中原 純

### Abstract

The studies dealing with the issues of caring for elderly people have been conducted since the late 1970s and classified into 3 categories ; measurement of care-givers' burden, factors of care-givers' burden and care-givers' burden through the position of cognitive stress theory. In terms of the measurement of care-givers' burden, the current review focuses on Caregiver Strain Index (CSI) and Zarit Burden Interview (ZBI), both of which are broadly used. The reliability and validity of CSI and ZBI have been acknowledged widely. In terms of the factors of care-givers' burden, factors of elderly people, care-givers and caring circumstances are the topics which are specially focused, and their interaction has been also discussed. Finally, in terms of cognitive stress theory, care-givers' burden has been considered as cognitive evaluation.

However, such studies have often produced discrepancy among the results and confused the discussion. This confusion is considered to be attributed to the problem that the definition of "care-givers' burden" is not consistent among researchers.

key words : care-givers' burden, measurement of care-givers' burden, factors of care-givers' burden, cognitive stress theory

### I はじめに

近年、ますます高齢化が進行し、65歳以上の高齢者の人口は約2,200万人で日本の人口全体の約18%にあたり、さらに2050年には約3,500万人で人口全体の約35%に達すると予想されている(厚生労働省, 2003)。それに伴い、高齢者を家族で介護することの必要性が年々増加し、家族介護者の介護負担(介護に伴う困惑感や犠牲感、介護者の日常生活の変化、経済的困窮、健康障害など)に関する問題がクローズアップされてきた。介護負担が大きくなることは介護の質の悪化につながる事が示されている(菊地・冷水・中野・中谷・和気・坂田・平岡・出雲・馬場・深谷, 1996)ように、介護負担は介護者のみならず介護される高齢者にとっても重要な問題である。その介護負担を軽減することを目的に、高齢者を介護している家族の受ける負担についての研究が1970年代後半から盛んに行われてきた(中谷・東條, 1989)。まず、研究の初期段階では介護者の介護負担を測定する尺度の開発が行われ、その後負担の要因を究明する研究が行われてきている。しかし、負担の要因を説明変数としたときに、同じ要因であっても研究によって負担への影響は異なり、統一された知見が得られていない場合も多い。その原因としてCare-givers' burdenの日本語訳の不統一が考えられた。Care-givers' Burdenは「介護負担」あるいは「負担感」と翻訳され、前者は比較的客観的な測定が可能な印象を受けるもの、後者は介護者個人の主観的なものという印象を受ける。そのため、同じCare-givers' Burdenを扱っている研究であっても、「介護負担」として扱った研究と「負担感」として扱った研究では異なる変数を扱った研究であると言える。さらに、「介護負担(負担感)」の定義そのものも研究者によって統一がなされていないことも考えられた。そこで本論では、介護負担

(負担感)に関する先行研究を、測定、要因、ストレス認知理論の中での位置付けという3つの角度から概観し、扱う変数やその定義が不統一であることによる研究の混乱、あるいは問題点を指摘することによって、今後求められる研究について検討していく。尚、本論の中では、「介護負担」あるいは「負担感」について引用する場合、引用元の論文に掲載されている言葉を尊重した。そのため、「介護負担」、「負担感」についてのそれぞれの定義は引用元の論文に従うものである。

## II 介護負担(負担感)の測定

介護による負担感を測定するための尺度としてはRobinson & Thurnher (1979)のCare-giver Strain Index : CSIなどが先駆である。CSIは不便さ、引きこもり、適応、睡眠障害、身体的経済的負担など13項目から構成され、「はい(1点)」、「いいえ(0点)」で計算する単純なものであるが、日本においても翻訳されているように、現在でも介護負担を測定する代表的な尺度の一つである(飯田・小橋, 2001; Robinson, 1983)。その後、いくつかの介護負担尺度が開発されてきたが、その中でも今日広く利用されている尺度として、Zarit, Reever & Bach-Peterson (1980)による22項目からなる負担感質問票(Zarit Burden Interview : ZBI)があり、12項目からなる簡易版も作成されている(Bedard, Molloy, Squire, Dubois, Lever & O'donnell, 2001)。現在ではこの尺度は各国で翻訳され、文化による違いなども検討されてきた(Choo, Low, Karina, Poip, Ebenezer & Prince, 2003; Gort, Mazarico, Balleste, Barbera, Gomez & de Miguel, 2003; O'Rourke & Tuokko, 2003; Taub, Andreoli & Bertolucci, 2004)。日本においても日本語版(J-ZBI)が作成され、その妥当性や信頼性も検討されている(Arai, Kudo, Hosokawa, Washio, Miura & Hisamitchi, 1997; Hirono, Kobayashi & Mori, 1998)。さらに最近では介護対象が痴呆性高齢者であってもJ-ZBIは高い信頼性と妥当性を示したという報告もある(大西・梅垣・鈴木・中村・遠藤・井口, 2003)。J-ZBIは各種の介護サービスが、介護者の負担を軽減しているかどうかを調査するために用いることも出来るため有用である(荒井, 1998)。参考までにJ-ZBIの項目をいくつか掲載した(表)。その他の尺度としては、Morycz (1985)によるFamily Strain Index : FSI、Kosberg & Cairl (1986)によるCost of Care Index : CCIなどがある。日本においては、中谷・東條(1989)が介護負担の精神的側面に注目し、主観的負担を測定する負担感スケールを開発して

表 J-ZBI質問項目(「0:思わない~4:いつも思う」の5段階で評価)

- 
1. 患者さんは、必要以上に世話を求めてくると思いますか
  2. 介護のために自分の時間が十分にとれないと思いますか
  3. 介護のほかに、家事や仕事などもこなしていかなければならず「ストレスだな」思うことがありますか
  4. 患者さんの行動に対し、困ってしまうと思うことがありますか
  5. 患者さんのそばにいと腹が立つことがありますか
  - ・
  - ・
  - ・
  18. 患者を誰かにまかせてしまいたいと思うことがありますか
  19. 患者さんに対して、どうしていいかわからないと思うことがありますか
  20. 自分は今以上にもっと頑張って介護すべきだと思うことがありますか
  21. 本当は自分はいまよりうまく介護できるのになあと思うことがありますか
  22. 全体を通してみると、介護をするということはどれくらい自分の負担になっていると思いますか
-

いる。また、木之下・朝田（1999）は介護負担を社会・家庭生活上の制約として測定する社会・家庭的負担評価票（Caregiver's Burden Scale : CBS）を開発している。

### Ⅲ 介護負担（負担感）の要因

負担感の要因は Morycz (1985) によって①高齢者に関する要因（属性、症状など）、②介護者に関する要因（属性、態度など）、③環境に関する要因（経済状況、介護ネットワークなど）に分類され、これまでにそれぞれの要因が研究されてきた。以下、この分類に基づいた先行研究および④その要因同士の相互作用についても先行研究を概観する。

#### 1. 高齢者に関する要因

高齢者に関する要因は性別、年齢、介護者との続柄などの属性に関する要因や痴呆の程度、ADL（歩行、食事、入浴など）状態などの症状に関する要因が考えられる。属性に関する要因は、介護者との関係において、男性（女性）が女性（男性）を介護する場合など、それぞれ特殊な困難があると考えられる。例えば、女性が男性を支える時の体力的な困難などがあげられるが、それらを直接調査した研究はほとんどみられない。また、介護者との続柄については②介護者に関する要因で述べる。一方、高齢者の症状に関する要因は身体的障害と認知的障害に分類される。身体的障害は、高齢者の身体的な機能の低下を指しており、それによって介護者の介護活動が増える場合に負担感の要因となる。認知的障害は i) 見当識障害・記憶障害に関わる症状、ii) 徘徊・収集癖・荷造り・火の不始末・性的異常などの問題行動、iii) 妄想・作話・幻覚などの症状、iv) 不安・ふさぎこみ・まとわりつきなどの症状、v) 異常な興奮・夜騒ぐ・攻撃的言葉などの症状や行動、vi) おむつはずし・弄便などの不潔行為に分類されている（冷水，1989）。前者は多くの研究で負担感を増加させ、後者は負担感を増加させていないことが示されている（Mangone, Sanguinetti, Baumann, Gonzalez, Pereyra, Bozzola, Gorelick & Sica, 1993）が、認知的障害も介護者の負担感を増加させるという報告（Hirono et al., 1998）やどちらの障害も負担感とは無関係であるという報告もある（Andrieu, Balardy, Gillette-Guyonnet, Bocquet, Cantet, Albaredo, Vellas & Grand, 2003）。さらに、Mangone et al. (1993) によると、負担感とは介護者の忍耐力を奪い、忍耐力の低下によって介護者が高齢者の身体的能力を過小評価してしまうことも示されているため、高齢者の身体的障害は負担感の負の連鎖を起こさせていると考えることも出来る。このように統一の結果が得られない背景として、Arai, Zarit, Kumamoto & Takeda (2003) は障害の程度を調べる尺度自体が統一されていないことを問題点としてあげている。

#### 2. 介護者に関する要因

介護者に関する要因としては、その属性といった客観的に測定し得る要因と、高齢者や介護行動への意識といった客観的に測定し得ない要因が考えられる。その中で、現在行われている研究の多くは客観的に測定し得る要因である。まず介護者の属性を考えると、介護者は男性よりも女性の方が多く、介護問題は女性の問題と考える研究者も多い（Shawn, Kneip, Joan, Castleman & Nicole, 2004）。性別によって負担感が異なっているという報告はないが、息子の配偶者が最も負担を感じ、息子自身が介護者の場合は比較的負担感が少ないことが示されている（Faison, Faria & Frank, 1999）。さらに、Faison et al. (1999) は、介護活動が多い人

ほど負担感の大きいことを報告した。その他、健康状態、介護期間、介護時間、介護内容、介護量などが検討されている（陶山・河野，2002）。また、大西・梅垣・鈴木・中村・遠藤・井口（2003）は要介護度を説明変数として分析を試みている。しかし、これらの要因については利用尺度の違いや分析方法の違いによって負担感との相関が異なるため、統一された知見は得られていない。

一方で、内的な要因についてもわずかではあるが研究されてきた。Guberman, Mahew & Maille（1992）は女性が家族介護者の役割を継続できる理由を明らかにするために、インタビュー調査を行っている。また、岡本（1986）は高齢者介護を行ってきた介護者の動機を検討している。これらの研究は質的な研究であったが、量的な研究としては鈴木・谷口・浅川（2004）が介護者の内的な要因を「介護の意味づけ」ととらえて項目を収集し因子分析を試み、「受容型」、「自己成長型」、「環境拘束型」、「囲い込み型」、「互惠型」の5因子を抽出している。そして「環境拘束型」と介護負担感との相関を示しているため、介護負担（負担感）研究にとって内的な要因についてさらに検討することは重要であると考えられる。

### 3. 環境に関する要因

環境に関する要因として最も重要と考えられているのは家庭の経済状況である。しかし、経済状況については調査をすることが倫理上きわめて困難であり、研究は政府など国の機関に委ねるしかないと考えられる。その他は、介護を手伝ってくれる援助者の有無が考えられる。一般的には介護を手伝ってくれる援助者がいれば負担感の軽減につながると考えられるが、この仮説は支持されないという報告（中谷，1992）がある。一方で、ソーシャルサポート研究において、援助者からの情動的サポートや情理的サポートが負担感を軽減させるという報告（新名，1992）や、家族会の支援の効果を示した報告（伊藤・石田，2001）がある。つまり、介護の援助者が身近にいたとしても、主介護者の介護負担（負担感）を軽減するような援助を的確に提供できてない場合もあると考えることが出来る。

### 4. 要因の相互作用

これまで Morycz の分類に従って①～③の要因を個別に述べてきたが、高齢者、介護者、環境に関する要因はそれぞれ独立で介護負担（負担感）に影響を与えることもあるが、要因同士の相互作用によって介護負担（負担感）に影響を与えることもあると考えられた。これまでに述べてきたような介護負担（負担感）の要因を扱った研究の中で、介護者と高齢者の相互作用過程の重要性を指摘し、介護初期の相互作用過程に焦点を当てた研究も行われている（Huchman, Leger-Krall & Wilson, 1997）。日本においては天田（1999a；1999b）が在宅で高齢者を介護する家族の価値変容を、相互作用論的アプローチから分析している。また、介護負担感軽減のためには福祉サービスを利用することが重要であるとされている（Hannappel, Calsyn & Allen, 1993）が、岡本（1987）は福祉サービスの利用希望の有無を分ける要因について、老人の身体的・精神的状況、介護の負担感や社会的資源の利用の積極性をあげている。また、高齢者介護サービス利用を抑制している要因としては、その利用に対するネガティブな態度を指摘し、分析が試みられている（Arai, Miura, Washio & Kudo, 1998；唐沢，2001）。このことは、高齢者に関する要因、介護者に関する要因、環境に関する要因は相互に関わってくることを示しており、要因間の関係を考慮していかなければならないことを示唆する。

#### IV ストレス認知理論の中での介護負担

ストレスと介護負担（負担感）の関係においては、ZBIと9つの下位尺度からなる The Brief Symptom Inventory : BSI (Derogatis & Melisaratos, 1983) との関係进行调查した結果、敵意や不安といった下位尺度と負担感とに強い相関が見られ (Anthony-Bergstone, Zarit & Gatz, 1988)、この結果から、介護負担感 は介護ストレスとして、ストレス認知理論 (Lazarus & Folkman, 1984) に基づいた研究の必要性が示唆された。その初期段階において、介護者の基本属性を介護ストレスラーとしてストレス反応との関係を分析した研究では、ほとんど相関は見られなかった (Haley, Levine, Brown & Bartoiucci, 1987)。その要因として、同じ介護ストレスラーを持つ介護者であってもそのストレスラーを重い負担と捉える介護者とそれほど重く捉えない介護者の存在が指摘された。そこで Lawton, Kleban, Moss, Rovine & Glicksman (1989) や Borden (1991) は介護ストレスラーとストレス反応の媒介要因として介護負担感を位置付けたモデルを提唱し、この問題の解決を試みている。

日本においては、翠川 (1993) が心理学的ストレス-対処モデルを取り上げ、対処スタイルを「問題解決型」、「接近・認知型」、「回避・情動型」と分類している。その中でストレス反応として扱われていた負担感 は対処スタイルと高い相関を示しており、また、負担感 はストレス認知理論の枠組みの中ではより認知的要素が強い ため、ストレス反応ではなく、認知的評価として捉えるべきものではないかと指摘されている (翠川, 1993; 新名, 1991)。この研究に引き続き、和気・矢富・中谷・冷水 (1994) はストレス認知理論に基づいて、介護期間、介護程度、痴呆などのストレスラーに対して、介護者自身が認知的評価 (介護負担感) を行い、その結果ストレス反応につながるというモデルを検討している。しかし、これらの研究ではストレス反応としてバーンアウトしか扱っておらず、ストレス認知理論の中での情動的反応、認知行動的反応、身体的反応といった側面を考慮に入れるためにはさらに多くの従属変数を導入した研究が必要とされる。また、これらの研究では認知的評価のうち二次的評価にあたるコーピングに焦点があたっていた。一方、安部 (2001) は認知的評価の中でも一次的評価にあたりと考えられる介護負担感に焦点をあて、ストレス反応との関係を検討している。和気ら (1994) や安部 (2001) の研究から、介護負担感を認知的評価と位置付けることは介護に関するストレス認知理論において妥当である と考えることは出来る。

#### V おわりに

##### 1. 「介護負担」および「負担感」の定義の混乱

現在負担感を測定する尺度として代表的な J-ZBI において、Zarit et al. (1980) は「介護負担」を「親族を介護した結果、介護者が情緒的・身体的健康、社会生活および経済状態に関して被った被害の程度」と定義し、その介護負担を測定する尺度として ZBI を作成した (荒井, 1998)。しかし、この尺度の日本語名は介護負担尺度と負担感質問票の2種類存在し、研究者によって定義が異なっている。それによって、これまで述べてきたように介護負担 (負担感) とその要因を検討するときに、定義の異なる尺度を利用すれば異なる結果が示されることも納得がいく。また、ストレス認知理論において、ストレスラーの中には心理的ストレスラーがあり、認知的評価には介護負担感があり、ストレス反応の中には情緒的反応があることを考慮すれば、現在使用されている「負担感」という感情は認知的評価にのみ属するもの と考えることには疑問の余地が残る。今後、「負担感」の定義を明確化し、その定義に従って研究をする必

要があると考えられる。

## 2. 今後必要とされる研究

日本においては介護負担（負担感）を測定する尺度としてはJ-ZBIが標準になりつつあるが、Arai et al. (2003)の指摘のように介護負担（負担感）と要因の関連においては、まだ研究は発展途上である。また、要因同士の関連も調査される必要性が指摘されている（Andrieu et al., 2003）。

介護負担（負担感）を軽減させることを目的とした研究において、介護を手伝ってくれる人がいることは負担感と無関係であったにもかかわらず、ソーシャルサポート研究では負担感軽減に効果的なサポートが示されていることを考えると、介護者が期待する援助と援助者が提供する援助との間に質的な違いがあるのではないかという仮説が成り立つ。今後、介護負担（負担感）の直接的な要因および媒介要因を明らかにし、負担感を軽減するための援助者の実行可能な介入の方法を検討していくことが必要であると考えられる。また、特に日本においては、2000年に開始した介護保険制度のもとで提供されたサービスが負担感を軽減させることが出来ているかどうかを調査し、「行われた援助が適切であったのか?」、「適切であったのであれば、それはどういう状況であったのか?」、「不適切であったのであれば、それはどういう理由から不適切であったのか?」などを分析することで、援助の質を高めるための資料を提供していくことが出来ると考えられる。

## 引用文献

- 安部幸志 2001 主観的介護ストレス評価尺度の作成とストレスャーおよびうつ気分との関連について 老年社会科学, 23, 40-49.
- 天田城介 1999a 在宅痴呆性老人家族介護者の価値変容過程 老年社会科学, 21, 48-61.
- 天田城介 1999b 痴呆性老人と家族介護者における相互作用過程—「痴呆性老人」と「家族」の視点から家族介護者のケア・ストーリー— 保健医療社会学論集, 10, 38-55.
- Andrieu, S., Balardy, L., Gillette-Guyonnet, S., Bocquet, H., Cantet, C., Albaredo, J.L., Vellas, B. & Grand, A. 2003 Burden experienced by informal caregivers assisting Alzheimer's patients in the REAL.FR study. *Review of Medical Interne*, 24, 351-359.
- Anthony-Bergstone, C.R., Zarit, S.H. & Gatz, M. 1988 Symptoms of psychological distress among caregivers of dementia patients. *Psychology and Aging*, 3, 245-248.
- 荒井由美子 1998 Zarit介護負担スケール日本語版の応用 医学のあゆみ, 186, 930-931.
- Arai, Y., Kudo, K., Hosokawa, T., Washio, M., Miura, H. & Hisamitchi, S. 1997 Reliability and validity of the Japanese version of the Zarit Caregiver Burden interview. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 51, 281-287.
- Arai, Y., Miura, H., Washio, M. & Kudo, K. 1998 Depression among caregivers of the elderly in need of care and their service utilization: A pilot study. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 52, 463-465.
- Arai, Y., Zarit, S.H., Kumamoto, K. & Takeda, A. 2003 Are there inequities in the assessment of dementia under Japan's LTC insurance system? *International Journal*

- of *Geriatric Psychiatry*, 18, 346-352.
- Bedard, M., Molloy, D.W., Squire, L., Dubois, S., Lever, J.A. & O'donnell, M. 2001 The Zarit Burden Interview: a new short version and screening version. *The Gerontologist*, 41, 652-657.
- Borden, W. 1991 Stress, coping and adaptation in spouses of older adults with chronic dementia. *Social Work Research & Abstracts*, 27, 14-21.
- Choo, W.Y., Low, W.Y., Karina, R., Poip, P.J., Ebenezer, E. & Prince, M.J. 2003 social support and burden among caregivers of patients with dementia in Malaysia. *Asia Pacific Journal of Public Health*, 15, 23-29.
- Derogatis, L.R. & Melisaratos, N. 1983 The Brief Symptom Inventory : an introductory report. *Psychological Medicine*, 13, 595-605.
- Faison, K.J., Faria, S.H. & Frank, D. 1999 Caregivers of chronically ill elderly perceived burden. *Journal of Community Health Nursing*, 16, 243-253.
- Gort, A.M., Mazarico, S., Ballesta, J., Barbera, J., Gomez, X. & de Miguel, M. 2003 Use of Zarit scale for assessment of caregiver burden in palliative care. *Medicina clinica*, 28, 132-133.
- Guberman, N., Mahew, P. & Maille, C. 1992 Women as Family caregivers; Why do they care? *The Gerontologist*, 32, 607-617.
- Haley, W., Levine, E.G., Brown, S.L & Bartlucci, A.A. 1987 Stress, appraisal, coping and social support as predictors of adaptational outcome dementia caregivers. *Psychology and Aging*, 2, 323-330.
- Hannappel, M., Calsyn, R.J. & Allen, G. 1993 Does social support alleviate the depression of caregivers of dementia patients? *Journal of Gerontological Social Work*, 20, 35-51.
- Hirono, N., Kobayashi, H. & Mori, E. 1998 Caregiver burden in dementia: evaluation with a Japanese version of the Zarit caregiver burden interview. *No To Shinkei*, 50, 561-567.
- Huchman, S.A., Leger-Krall, S. & Wilson, H.S. 1997 Early probable Alzheimer's disease and awareness content theory. *Social Science and Medicine*, 45, 1399-1409.
- 飯田紀彦・小橋紀之 2001 在宅介護者のクオリティ・オブ・ライフと介護負担の評価—Care Strain Index と自己記入式 QOL 質問票改訂版を用いて— *心身医学*, 41, 12-19.
- 伊藤真弓・石田祥子 2001 痴呆性高齢者家族会の家族介護者に及ぼす効果 運動障害教育・福祉研究, 5, 17-25.
- 唐沢かおり 2001 高齢者介護サービス利用を妨げる家族介護者の態度要因について *社会心理学研究*, 17, 22-31.
- 菊地和則・冷水 豊・中野いく子・中谷陽明・和気純子・坂田周一・平岡公一・出雲祐二・馬場純子・深谷太郎 1996 在宅要介護高齢者に対する家族(在宅)介護の質の評価とその関連要因 *老年社会科学*, 18, 50-62.
- 木之下明美・朝田 隆 1999 在宅痴呆性老人に対する介護にかかわる社会・家庭的負担評価票(CBS)の作成とその臨床的意義の検討 *老年社会科学*, 21, 76-85.



厚生労働省 2003 厚生省白書

- Kosberg, J.I. & Cairl, R.E. 1986 The cost of Care Index:A case management tool for screening informal care providers. *The Gerontologist*, 26, 273-278.
- Lazarus, R.S. & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York :Springer Publishing Company.
- Lawton, M.P., Kleban, M.H., Moss, M., Rovine, M. & Glicksman, A. 1989 Measuring caregiving appraisal. *Journal of Gerontology*, 44, 61-71.
- Mangone, C.A., sanguinetti, R.M., Baumann, P.D., Gonzalez, R.C., Pereyra, S., Bozzola, F.G., Gorelick, P.B. & Sica, R.E. 1993 Influence of feelings of burden on the caregiver's perception of the patient's functional status. *Dementia*, 4, 287-293.
- 翠川純子 1993 在宅障害老人の家族介護者の対処(コーピング)に関する研究 社会老年学, 37, 16-26.
- Morycz, R.K. 1985 Caregiving strain and the desire to institutionalize family members with Alzheimer's disease. *Research on Aging*, 7, 329-361.
- 中谷陽明 1992 在宅障害老人を介護する家族の“燃えつき” — “Maslach Burnout Inventory” 適用の試み — 社会老年学, 36, 15-26.
- 中谷陽明・東條光雅 1989 家族介護者の受ける負担—負担感の測定と要因分析— 社会老年学, 29, 27-36.
- 新名理恵 1991 痴呆性老人の在宅介護者負担感—研究の問題点と今後の展望— 老年精神医学雑誌, 2, 754-762.
- 新名理恵 1992 痴呆性老人の家族介護者の負担感とその軽減 社会老年学, 14, 38-44.
- 岡本多喜子 1986 老年期痴呆の老人の扶養に関する分析枠組み 社会福祉学, 27, 51-79.
- 岡本多喜子 1987 精神症状に問題のある老人の介護者にみる社会福祉サービスの利用要因 社会老年学, 29, 44-50.
- 大西丈二・梅垣宏行・鈴木祐介・中村 了・遠藤英俊・井口昭久 2003 痴呆の行動・心理症状(BPSI)および介護環境の介護負担に与える影響 老年精神医学雑誌, 14, 465-473.
- O'Rourke, N. & Tuokko, H.A. 2003 Psychometric properties of an abridged version of The Zarit Burden Interview within a representative Canadian caregiver sample. *The Gerontologist*, 43, 121-127.
- Robinson, B.C. 1983 Validation of a Caregiver Strain Index. *Journal of Gerontology*, 38, 344-348.
- Robinson, B.C. & Thurnher, M. 1979 Talking care of aged parents:A family cycle transition. *The Gerontologist*, 19, 586-593.
- Shawn, M., Kneip, A.R.N.P., Joan, B., Castleman, R.N. & Nicole, R.N. 2004 Informal caregiving burden:an overlooked aspect of the lives and health of women transitioning from welfare to employment? *Public Health Nursing*, 21, 24-31.
- 冷水 豊 1989 痴呆性老人の家族介護に伴う客観的困難の類型 社会老年学, 29, 16-26.
- 陶山啓子・河野保子 2002 在宅高齢介護者の疲労感とその要因分析 老年社会科学, 24, 80-89.
- 鈴木規子・谷口幸一・浅川達人 2004 在宅高齢者の介護をになう女性介護者の「介護の意味

づけ」の構成概念と規定要因の検討 老年社会科学, 26, 68-77.

Taub, A., Andreoli, S.B. & Bertolucci, P.H. 2004 Dementia caregiver burden:reliability of the Brazilian version of the Zarit caregiver burden interview. *Cadernos de saude publica*, 20, 372-376.

和気純子・矢富直美・中谷陽明・冷水 豊 1994 在宅障害老人の家族介護者の対処（コピーング）に関する研究(2)－規定要因と効果モデルの検討：社会福祉援助への示唆と課題－ 社会老年学, 39, 23-34.

Zarit, S.H., Reever, K.E. & Bach-Peterson, J. 1980 Relatives of the impaired elderly:Correlates of feelings of burden. *The Gerontologist*, 20, 649-655.